

高等学校

平成 5 年 度

教育 研究 員 研究 報告 書

国 語

東京都教育委員会

平成 5 年度

教 育 研 究 員 名 簿

No.	学区	学 校 名	氏 名
1	1	都立雪谷高等学校	樋口 淳子
2	1	都立田園調布高等学校	光江 徳尚
3	3	都立鷺宮高等学校	宮岡 良成
4	4	都立池袋商業高等学校	三縄 亮
5	5	都立足立西高等学校	小林 千佐子
6	5	都立水元高等学校	丹藤 博文
7	6	都立江東商業高等学校	大川 敦士
8	7	都立八王子高陵高等学校	福永 晋三
9	8	都立多摩高等学校	松田 晴美
10	9	都立小平南高等学校	高田 純一
11	9	都立東村山西高等学校	牧野 敦
12	10	都立府中高等学校	下田 尚子

担 当

教育庁 指導部高等学校教育指導課 指導主事 菅 沢 茂

研究主題

個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、
表現力と理解力を伸ばす指導の在り方

目 次

I 主題設定の理由	2
II 主題解明の方法	2
III 指導の実際	4
1 個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、 表現力を伸ばす自己表現指導の工夫	4
2 個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、 理解力を伸ばす評論文指導の工夫	9
3 個性に応じた学習を通して、古典への関心を高め、 理解力を伸ばす古文指導の工夫	14
4 個性に応じた学習を通して古典への関心を高め、 理解力を伸ばす漢文指導の工夫	19
IV まとめと今後の課題	24

〔個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、表現力と理解力を伸ばす指導の在り方〕

I 主題設定の理由

国際化の進展する世界の中で、多くの日本人は外国人との付き合い方に不慣れであり、何を考えているのか分からないなど日本人に対する辛口の批評も多い。現代の社会において将来の日本を担う若者に求められるのは、明確に自分の考えをもち、それを論理的に堂々と主張することのできる能力であろう。しかし、授業において自分の考えをまとめ、意欲的に自己を主張しようとする生徒はまだ多くはなく、教師の問いかけに積極的に応じる生徒はさらに少ない現状である。このことは、生徒が自分なりの意見をもち、社会の中で積極的に発言する習慣ができていないと同時に、指導者自身が関心・意欲を高める授業を創造する点で不十分であると考えられる。こうした状況を改善するために、まず、生徒の言葉に対する関心・意欲を育て、生徒に言語の教育を通して自信をもたせることが大切である。このため、現在の高校生の様々な特性や進路希望等を踏まえて、一人一人の個性に応じた学習展開を工夫していくことが必要となっている。すなわち、生徒の一人一人が、自分なりの個性を生かせるような学習内容・方法を探ることが先決である。

以上の点から、今年度の研究員は標記の主題を設定し、現代文2、古典2、合わせて4分野にわたる研究を試みた。

II 主題解明の方法

主題解明に当たって、「表現」「評論文」「古文」「漢文」の4分野にわたり、4班に分かれて研究を進めた。

「表現」班は、「個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、表現力を伸ばす自己表現指導の工夫」を研究した。国際間の結び付きが一層強まり、情報社会が高度に進展していく中で、生徒が自分の考えを自分の言葉で論理的に表現できることが大切であるとの認識に立ち、その前提として「自己を見つめ、自分の言葉を発見する」ことの意義と方法を学習することをねらいとした。そのために、生徒の言葉に対する興味・関心を尊重し、生徒が自己を肯定的に評価して自信をもち、生き生きとした表現活動を行うよう配慮した。また、自己を肯定的に表現することを通して、言葉の働きに着目させ、国語への関心を喚起するよう工夫をした。さらに、他者の表現の内容や方法を知ることにより自己を見つめ直す機会とした。具体的には、「主題文演習」や「構成表」の作成を通して自分の考えをまとめ、個性に応じた表現となるよう指導し、さらに学習過程の最終段階として「感想カード」を用いて生徒が互いの表現を相互に評価し合う場面を設定した。

「評論文」班は、「個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、理解力を伸ばす評論文指導の工夫」を研究した。読解を通して論理的な考え方を身に付けさせるとともに、さまざまな考え方に接し、自分の意見を的確に文章にまとめることをねらいとした。題材には、生徒に身近で具体的な例証を挙げやすいことから「日本語」を選んだ。「日本語」については数多くの評論文が書かれている。本単元主教材の筆者と反対の立場の文章をはじめとして、様々の立場からの意見を豊富に示すことができる。これによって、生徒の視野を広げることに役立つ。また、生徒が自らの言語体験を基に考えることができる。このため、「ワークシート」にも無理なく自分なりの意見を文章化することができた。さらに、まとめの段階で、生徒のアンケート結果や提出プリントの中身について発表し、相互に意見を交換する中で徐々に自分の意見を磨き、論理的な思考力を深めていった。

「古文」班は、「個性に応じた学習を通して、古典への関心を高め、理解力を伸ばす古文指導の工夫」を研究した。軍記物語の読解・鑑賞を通して古典の時代から連綿とつながる普遍的な人間の心性に触れ、古文に対する関心を高めることをねらいとした。その際、文法に関する指導は読解の補助程度にとどめ、「人物カード」などを用いて主要な登場人物に対する興味・関心を深めさせることに焦点を絞った。さらに「登場人物への手紙」を書いて古人の生き方を追想し、自分なりの思いを個性的に表現する力を養うよう配慮した。また、音声表現としての朗読を重視し、『平家物語』のもつリズム感を味わう学習場面を設定することとした。

「漢文」班は、「個性に応じた学習を通して、古典への関心を高め、理解力を伸ばす漢文指導の工夫」を研究した。その際、漢文の学習過程を見直し、入門・基礎・発展の3段階に分けた。また、漢文を簡潔に表現された古文の一種ととらえ、現代語訳中心の授業で事足りるとせず、日本の重要な古典としての意義付けを意図的に行うこととした。

「入門」編には、一般的な故事成語や格言を教材として、比較的まとまった文章から出発することとした。また、訓読法に慣れさせるとともに、ビジュアルな教材を使って中国の文化や風土に触れさせ、漢文に対する親近感を養うよう努力した。「基礎」編では、日本漢文を取り上げて文に慣れさせ、日本の古典としての漢文を体験させることを目指した。「発展」編では、漢字文化圏の中の日本という大きな視点から学習し、漢文に対する関心と理解を高めることを意図した。すなわち「英雄の死」を共通テーマとして日本の『日本外史』・中国の『史記』・朝鮮半島の『三国史記』におけるそれぞれの漢文を比較し、味わった。また、アジア各国における漢字の受容と淘汰の歴史について考察し、日本において漢字が使用され漢文の伝統が根付いていることについて改めて認識させるよう配慮した。

Ⅲ 指導の実際

1 個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、表現力を伸ばす自己表現指導の工夫

1. 単元 言葉と出会う

2. 教材 『17歳のポケット』(山田かまち著)

3. 単元の目標 ①作文の手順を段階的に理解し、基礎的な表現能力を伸ばす。

②作品の鑑賞を通して自己を見つめ直すとともに、言葉や表現に対する関心と理解を高める。

③自分の内なる言葉と出会い、自己を的確に表現する。

4. 単元設定の理由

現代人は、高度情報化社会の到来や国際化の急速な進展等に直面して、その対応に苦慮している。特に、教育の場においては、情報機器の活用、外国人講師による語学教育、ホームステイによる国際交流など、この問題と深刻なかかわりがある。このような時代・社会において、自己を見つめ、自分の言葉を発見し、自分なりの考えを形成することが極めて大切である。さらに、情報を取捨選択し活用する能力を育てるとともに、言葉に対する関心を高めることを通して我が国の歴史や文化を尊重する態度を育てることが、国際化、情報化社会に主体的に対応することになるのである。

そこで本単元では「言葉と出会う」ということに着目した。自己を見つめることにより、自分の考えを形成し、他者あるいは社会と主体的に関わっていくことができる。そのためには、的確な自己表現が必要となる。すなわち、自己の言葉の獲得こそ自己表現の第一歩となるのである。

ところで、現代高校生の自己表現の実態はどうであろうか。おしゃべりは好きでも書くのは苦手という生徒は少なくない。しかし、自己を自由に表現したいという欲求は、本能として誰もが持っているものだ。例えば、生徒に自己紹介を求めるとたちまち四苦八苦する。長所・短所・興味などを挙げるが、形式にとらわれて自己を語りきれない。自分の考え、感じ方、生き方を語るべき言葉を見出せない。何とかして表現したいという意欲をもちながら自己の言葉を発見できず、安易に流行語やパターン化した言い回しによって置き換えることが多い。このことから察するに、生徒の言語環境は必ずしも好ましいとは言えないが、若者らしい生き生きとした言語感覚のあることも見逃せない。したがって、教師は指導者としての視点のみにとらわれず、生徒一人一人の個性を伸長させるという観点の下に、自己の言葉の発見を促すことに主眼を置くこととした。

学習活動としては作文である。作文指導といえば、小論文、意見文など論理性を重視した客観的な文章を取り上げることもある。しかし、本単元では生徒が興味・関心を示すもの、つまり好きな言葉、感動した言葉を抽出し、その言葉を通して自己表現を試みる。また、他の生徒の表現にも触れ、自己の見方、考え方との異同について考え、自己主張が独善的、排他的なものにならないよう配慮した。

教材『17歳のポケット』（山田かまち著）は高校生と同世代の若者の作品である。好奇心旺盛で、早熟な少年の生への葛藤が、詩や絵画やデッサンとして表現されている。ここでは、作品の読解に重点を置くのではなく、自己表現の例として味わい、自己の発見につながるよう指導を工夫する。また、この授業を通して、生徒が言葉を模索しつつ表現を試みていくことを楽しみ、充実感を味わえるような学習活動となるよう指導計画を作成した。

5. 指導計画（3年生対象 配当時間6時間）

時	指導事項	学 習 活 動	指導上の留意点
第1時	①ある事柄について、自分の意見を明確にもち、それを表現する。	①「主題文演習」により、自分の意見を短くまとめる練習をする。 《演習の観点》 ア. 自分の意見は明確な立場に立っているか。 イ. 形式にとらわれ、本音で語ることを忘れてはいないか。	①「主題文演習」のプリントを配付し、「主題文」について説明した後、プリントを完成させ提出させる。 ②提出させたプリントは、左記の観点に基づき、添削して第3時に返却する。
<p>《主題文演習について》</p> <p>第1時の「主題文演習」とは、ある事柄（例えば、「思いやり」「車社会をどう考えるか」など、高校生の興味や関心のありそうなものを、生徒の実態に合わせて選ぶ）について、自分の言いたいことの中となるもの（主題）を50字以内にまとめる練習で、指導者は5つ程度の事柄と、50字の記入用紙をあらかじめ用意しておく。</p>			
第2時	①グループを編成する。 ②教材を読み	①座席順などでグループを作り、班長を1名決める。 ②山田かまち著『17歳のポケット』を	①グループの数は発表にかかる時間との関係で調整する。 ②山田かまちについて、簡単

第2時	話し合う。 ③意見や感想を発表する。	読み、意見や感想を述べ合う。 ③発表者(=班長)は、グループの意見や感想を発表する。	に紹介しても良い。 ③生徒が発表したことを肯定的に講評をする。
第3時	①自己の内に あるものを、 言葉として表 現する。	①「好きな言葉」「感動した言葉」を 思いつくまま列挙する(数は自由)。 ②列挙した言葉のうち3つ程度につい て、なぜ好きなのか、なぜ感動したの かを、第1時の「主題文演習」の要領 で表現する。 ③主題文としてまとめたものを提出す る。その際に自分が600字の作品とし て書く言葉をどれにするか、選んで印 をつける。	①考え過ぎず、素直に挙げる ことが、自己発見につながる ことを注意する。 ②列挙する言葉は、肯定的な 内容となるよう注意する。 ③各生徒が選んだ言葉の主題 文を、「主題文集」として、 第2時で編成したグループご とにまとめておく(第4時まで)。 その際、筆名は伏せて、 番号を付しておく。
第4時	①グループ内 で、相互に感 想を書く。	①第3時に書いた、他の生徒の「主題 文」を読み、「感想カード」に感想を 記入する(無記名)。 《感想を書く際の留意点》 ア. 相手との共通点・相違点や印象 に残った表現などに注意して書く。 イ. 思いのまま素直に感想を書く。 ②班長は「感想カード」を回収し、該 当する生徒にカードを配付する。	①第3時の「主題文集」と、 「感想カード」をグループご とに配付する。「感想カード」 は、番号記入欄と野線を引い た用紙を用意し、主題文一件 につき1カード使うようにす る。 ②無記名である意図を説明し 無責任なことを書かないよう 注意する。
第5時	①文章構成の 基本を理解す る。	①文章の構成の立て方や、原稿用紙の 使い方を理解する。 ②「構成表」のプリントにしたがって	①文章の構成の立て方や、原 稿用紙の使い方を解説する。 ②構成を立てる際には、第4

	②作品の構成を立てる。	作品の構成を立てる。	時の他の生徒の感想も参考とするよう助言する。
<p>《構成表について》</p> <p>第5時で使用する構成表とは、項目として、「題」「主題文」「構想」「書き出しの一文」からなるもので、実際の作品を書くに当たって予備作業として書かせるものである。「構想」では、序・展開・結びごとに書きたい内容をメモ書きする。</p>			
第6時	①作品を完成する。	①第5時の「構成表」に基づいて、作品（600字）を完成・提出する。	①回収した作品は、下記評価の観点に基づいて、添削・評価し、次時以降に返却する。

6. 評価の観点

- ① ア. 「主題文演習」を通して、自分の考えを的確にまとめることができたか。
イ. 山田かまちの作品を通して、自己を見つめ直す機会とすることができたか。
ウ. 「構成表」の作成を通して、構成の立て方や作文の基本を正しく理解できたか。
- ② ア. 意欲・関心をもって、のびのびと表現する能力を高めることができたか。
イ. 自己の内にある言葉を、自分の言葉で的確に表現することができたか。

7. 考察

本單元において、意図したことは、他者の言葉に触れながら自己の内なる言葉と出会い、そこから表現行為を通して自己を発見していくというものである。もちろん、教室の実態として生徒は表現活動に積極的とは言いがたく、自己発見そのものが一朝一夕に果たされるものでもない。そこで、①主題文演習・構成表など、予備的段階的な活動を重視する（指導計画第1時・第3時・第5時）、②山田かまち『17歳のポケット』を読み、他者の表現や言葉に触れる（第2時）、③お互いの表現について意見や感想を交流し合う（第4時）、④生徒の表現を肯定的に評価する、といった方針を立て実践を試みていった。①については、あまり生徒が負担に感じないようにプリントを作成したり、「好きな言葉」「感動した言葉」といった生徒の身近なテーマを掲げ、それについて書かせる。内容については生徒自身の主体性に任せる方向で進めていった。②の『17歳のポケット』を抜粋してプリントして読ませたところ、予想以上に生徒の反応は顕著であった。山田かまちが17歳の時に書いたものだけに、「テスト」「愛」「生活に夢を」

「夢をこわすような事が多すぎる」「生きていくことは」など生徒にとっても身近な内容が取り込まれており、しかも思春期に特有の感性が散見され、生徒は感動を隠さず、また様々に刺激を受けていたようである。③は、学校においてもお互いあまり正面きって意見を交わしたりする機会が少ない分困難が予想されたが、実際の授業では逆に新鮮だったようで、積極的に意見を述べる生徒もいた。ただ、他者の表現を批評することの難しさを随分と感じていたようである。④の肯定的評価は本単元においてとりわけ重視した点である。ある目標を設定して生徒をそこにたどりつかせるというのではなく、また添削を加え不十分な点のみを指摘し、生徒が表現活動そのものに嫌気がさすようでは表現自体が成立しないだろう。もちろん指導は必要であるが、肯定的に評価することで表現活動に対する関心や意欲を喚起することを大事にした。

以上のことから、生徒が最終的に書いた作品の一部を挙げることにする。

・「人はなかなか一生懸命になる時がない。でも誰かが一生懸命になっている時の姿はほほえましく、そして素敵だと思う。私は他人に恥ずかしい姿を見せたくなくて一生懸命になることができなかった。」（「一生懸命な時の姿」A校）

・「私は、九歳の時に見た夕陽がすごく印象的で、今でもはっきりと覚えている。季節は夏で、海の近くでキャンプをしていた。（中略）私はこの時初めて、色鉛筆や絵の具にはない色があるんだなと思った。」（「夕陽」A校）

・「眠っている時に見る夢の中で、現実と通じるものがある。その夢が現実の何かを問いかけていることもある。幼い頃何度も同じ夢を見ていました。それは竜が私の体に巻きつくというもので、そのときの胸苦しさと恐怖はいまでも鮮明に覚えています。（中略）竜が何なのかは今でもわからないけど、私が病気になったり祖母が亡くなったり私にとって大変なことが起きる時に竜が出てくることに気が付きました。」（「私の夢」B校）

・「私は『透明』という言葉から思い付くものが好きです。ビー玉やガラス、宝石、水などを見ていると心がとても落ち着きます。透明な物を見ているときの落ちつきは、何か他の物で紛らわすより、心にゆとりがあります。見ている間、短い時間ですが、その透明な物は心の落ち着きを取り戻すのに一番の物です。」（「透明な物」C校）

紙面の都合上、ごく一部の作品しか掲載できなかったが、生徒のみずみずしい感性によるオリジナルな世界観や独自の内的世界が表出されており、また生徒なりの意味付けが新鮮で印象深く感じられた。今後とも教材の選定、生徒の相互評価と指導者による評価とのかかわり、主題文演習の指導法の開発など、実践的な研究をさらに深めたいと考えている。

2 個性に応じた学習を通して、国語への関心を高め、理解力を伸ばす評論文指導の工夫

1. 単 元 評論文を的確に読解する。

2. 教 材 梅棹忠夫『世界の中の日本語』（「新国語Ⅰ」）

3. 単元の目標

- ①日本語について様々な視点を持ち、興味・関心をもつ。
- ②日本語の国際化について考え、日本語の使い手としての自覚をもつ。
- ③自分の意見を持ち、文章化し表現する。

4. 単元設定の理由

評論文を読むことの意義は、論理の展開を正しく追い、筆者の言いたいことを正確につかむことである。それと同時に論理的な見方や考え方を養い、筆者の考えに対する生徒個人の意見を引き出すことでもあると考える。この時に注意したいのは、生徒は筆者の考えに説得されてしまうという点である。広い見識をもった筆者の考えを、ただ一つの正しい意見であると生徒は考えがちである。筆者の考え方のほかにも様々なものの見方、考え方があることを紹介して自分でものを考えていくための道筋を与え、それらを比較して読み、考えることによって、生徒が視野を広げ、自分にとって必要な情報を取捨選択して、自分の意見をまとめられるようにする。そして、今度は自分の意見をもって、再度、本教材を読めば、さらに理解を深めることにもなるであろう。

ところが、評論文は、語句が難しい、内容に興味をもてない、堅苦しい、と嫌う生徒がいる。また、学習活動の様々な場面で生徒に意見や感想を求めると、反応は早いが一言であっさり片付けられてしまうことが多い。現代は映像文化が興味をひく題材を分かりやすく提供してくれる。活字から得る情報を軽視しがちである。また大量の情報の中から自分の意見を選び取るための即断力は必要なことであろうが、判断を誤らないためにはじっくり考える時間も必要であろう。それだけに、生徒には深い思考力を身に付けさせることが大切である。

このような現状を踏まえて、今回評論文の読解を研究の主題とした。評論文を的確に理解することで、内容の分析・ものの考え方・論旨の展開・新たな知識の獲得といった基礎・基本を学びとり、自己の明確な意見を形成することが主な目標である。

『世界の中の日本語』（梅棹忠夫著）は比較的分かりやすい表現で書かれており、文脈を注意深く追うことで論理をつかみやすい文章である。また日本語の国際化をテーマにしており、最近の日本語学習者の増加や日本で活躍する外国人の増加という状況から、生徒が関心を持ち、取り組みやすい内容でもある。さらに自分たちが使用している日本語という視点から、流行語

や敬語、外来語、また海外流出していった日本語の語彙などについて、身近な具体例を収集・整理しながら現在の日本語に目を向けるとともに、将来の日本語の在り方を考える好機となろう。言語及び文化を通じて国際化は進行し、その中において自分はどう関わっていくか、発展的に考えさせたい。

本教材中の「おぞましき日本語」については生徒によって感じ方、考え方がいろいろ分かれるところである。そこで本教材の文章を正確に理解した上で、個々の意見をもたせ、個性を生かすことを次のねらいとした。筆者の考えと似た立場の意見（『国家語を越えて』、『言葉の自由を求めて』田中克彦）、対立する意見（『文章読本』丸谷才一、など）、及び新聞のコラムなどをプリントで紹介したり、日本語についてのアンケートを実施したりして、生徒自身が自分の意見をもつ助けになるように工夫した。

日本語については、多くの意見があり、多くの評論が書かれているので生徒に様々な意見を紹介することが比較的容易である。また数多くの論説を取捨選択する生徒の側でも、自分の言語体験を基に考えることもできる。あるいは自分が日常使っている言葉を内省することにもなり、生徒独自の意見を引き出すことができる。

自分の意見を決められた字数で文章化し、表現するためには、日頃の継続的な学習が必要となろう。表現の方法は生徒の実態に合わせて行うこととする。今回は文章化を主眼としないので手段については詳しく述べないが、書く機会を1回でも多く与え、まとまった文章を書くことに慣れさせるのも肝要と思われる。自分の意見の輪郭は、書くことによってはっきり見えてくるものである。

5. 指導計画（第1学年対象 8時間配当）

	指 導 事 項	学 習 活 動	指 導 上 の ポ イ ン ト
第1時	（導入） 教材への抵抗感をなくし、関心をもつ。 （展開）	①プリント1（日本語を使用する人口・日本語学習者の数など日本語についてクイズ形式にしたもの）で世界の中の日本語の位置を理解する。 ②全文を音読して難解な語句をチェックし次回までに意味調べを行う。	日本語が上位に入っていること、英語が1位ではないことを確認させる。 日本語の学習者が増加していることを実数を示して、気付かせる。 ・ 初読の感想を聞いてもよい。 プリント1の正解率をまとめ、次回に報告、全体の傾向をつかむ。
第2・3・4時	中心語句に注意し記号等を使って文章を的確にまとめ正確に理解する。	①プリント2（本文の内容に即したもの）を使い文章を的確に理解する ②指示語に注意し、文脈を正しく読み取る。 ③筆者が取り上げている具体例を分析する。	プリント1の統計結果を発表する。 机間巡視で語句の意味調べをやっているか、点検する。 ③生徒に同じような例を考えさせてもよい。また、他の具体例をプリント3で紹介し、理解を一層深めさせる。特に注意する点は以下のところ。

第2・3・4時		④ 相対・絶対などの、評論文でよく使われる用語の意味について、文脈の中で理解する。	1 リングア・フランカとして流通している例 2 文化が国際性を獲得したと考えられる例 3 おどましき日本語の例 4 国語の精髓を守ろうとした例 5 変容を遂げてきた日本語の例 適宜指名し、文章を正しく理解できているかを評価する。ノート提出。机間巡視等でノート整理を点検する。
第5時	(まとめ) 筆者の主張をつかむ。 (発展)	① 筆者の主張をまとめながら、論旨を正確に理解する。 ② 「おどましき日本語」についてどう考えるか、2～4行のコメントを書く。プリント4(「おどましき日本語」に賛成・反対の立場を教師がまとめたもの)を参考にする。	① 筆者の考える「日本語の国際化」について正確に読み取らせる。「おどましき日本語」に特に注意。指名して板書させる。 ② 率直な意見を自由に書かせ回収し、10人程の意見を次回までにまとめておく。意見を発表させてもよい。 筆者の考えをまとめられたか、机間巡視する。ノート提出により簡潔に自分の意見をまとめられたか、評価する。
第6・7時	いろいろな考え方をとらえ、考えをさらに深める。 自分の意見をもつ	① プリント5(コメントをまとめたもの)により様々な意見を知る。 ② プリント6(筆者とは反対の考えの文章・筆者と同じまたは似た考えの文章を紹介したもの)を読み、さらに視野を広げる。 ③ アンケートに答える。	① 意見交換させる。 ② 指導者の考えを述べるのはよいが、生徒に押し付けないように注意する。次回に作文を書くことを説明し、内容を考えさせる。構想メモを書かせ、次回に備える。 ③ 生徒の自己評価として、指導者による評価の不備を補う。 友人の意見、プリント6の意見を理解できたか、それに対して自分の意見を持ち、発表できたかを評価する。
第8時	(作文) 自分の意見を文章化し表現する。	日本語の国際化、または「おどましき日本語」についてどう考えるか、自分の意見を文章にまとめる。	時間内に書かせるのを原則とするが、書き終わらない場合は次回に提出させる。 「日本語について考えたこと」とテーマを広げると文章が書きやすい。

6. 評価の観点

- ① 導入時 ア. 日本語に興味・関心をもつことができたか。
- ② 展開時 イ. 家庭学習として語句の意味調べをやっているか。(机間巡視)
ウ. 文章理解のための質問に対して、考えているか。(指名)
エ. 文章理解のための質問に対して、答えることができたか。(指名)

オ. 文章を正しく理解できたか。

③まとめ カ. 筆者の意見をノートにまとめることができたか。(机間巡視)(提出)

④発展 キ. 筆者の意見に対して、自分の意見をもつことができたか。

ク. 友人の意見を正しく理解できたか。それに対して自分の意見を発表できたか。

ケ. 様々な考えを理解できたか。(指名)

コ. 自分の意見を文章にまとめることができたか。(作文)

⑤総合 サ. 日本語の使い手としての自覚をもつことができたか。

7. 考察

評論文を的確に理解するという主たる目的は達成されたといえる。その理由として次の点が考えられる。

- (1) 日本語をテーマにした文章であるために、生徒が抵抗なく教材に接することができた。
- (2) 語句もそれほど難しくなく、論理展開も明確であり、筆者の主張をつかみやすかった。
- (3) 教師が豊富な具体例をあげることで、関心をもたせ、それが生徒自ら具体例を考えたり探したりすることに発展し、文章理解の助けになった。
- (4) いろいろな見方を理解して日本語に関する考えを深めることができた。
- (5) 識者でも意見が分かれているため、生徒が自由に自分の意見をもつことができた。
- (6) プリント、作文等で教材を様々な角度からとらえたり、繰り返し読ませたりする機会を設定した。

様々な考えに接することは視野を広げるだけでなく、自分の意見をもつ助けになる。また繰り返し読む機会を与えることにより、理解を一層深めることができた。

「個性に応じた学習」の主眼は、筆者の考えに対して自分はどう考えるのか、自分の意見を表現できるようにすることであった。そのために次の手順をふんだ。

- A 筆者の考えに賛成、反対の立場による識者の意見を紹介。
- B 「おぞましき日本語」について各自の考えをコメントに表し、代表的な意見をまとめたプリントで示し、さらに自分の考えを深める。
- C 最終的に自分の考えを文章に表す。

上記Aについては、なるべく分かりやすいように教師がまとめるが、意見を取り違えた生徒が若干いる。その原因は、興味、関心を抱いた部分だけを自分に都合のよいように解釈するためと考えられる。また、生徒の能力によっては、短時間で意見を理解できない場合もある。し

かし、自分の意見をもつために、いろいろな意見を読むということが極めて重要であるということが分かった。

上記Bについては、賛成・反対・提案などバラエティーに富み、さらにそれを読んで意見を変えた生徒も出るなど、効果的であった。ディベートと異なり、いろいろな意見を短時間に理解できる利点がある。

上記Cについては、文章の表現力が必要となり生徒によって違いが生じる。年間を通して継続的に指導する必要がある。教材のたびにテーマを設定し文章を書かせるのが効果的である。

今回の作文では自分の意見を明確に表すことができた生徒が多かった。やはりテーマが取組みやすかったためと思われる。内容は筆者の意見に賛成の方が多かった。しかし、一方で「美しい日本語を守るべきである。」「外国人が学びやすいように変える必要はない。」「日本語を変えるのは日本人に限る。」というような反対意見を明確にうち出したものもあった。エスペラント語のような世界語については一言も触れなかったにもかかわらず、世界共通の言語を提案した生徒が何人か出たことは興味深い。「日本語をやめて英語に切り替えよ」、という意見も出た。それぞれ参考文献を紹介することで、いっそう考えを深めることになるであろう。

意見の評価について注意することがある。生徒は自由に自分の考えをもってよいのだが、指導者の影響を少なからず受けてしまう。筆者の考えに同感であり、日本語の国際化や変革を支持する指導者のもとでは、どうしても似た意見をもちやすくなるように思われる。しかし、これは当然のことであり、ある程度指導者が自分の価値観を表明することは、学習活動への刺激にもなる。大切なことは、生徒が教師と反対の意見をもって、それを認めることである。賛成か反対かを評価するのではなく、自分の意見をもつことができたか、独善的になっていないか、論理的に展開することができたか、などについて適切に評価することである。

作文の前にアンケート調査を試みた。生徒自身の自己評価のためではなく、分からなかった点を聞くことで指導者の不備を補うためでもある。生徒側のつまづきを見落としていることもある。本教材では、言葉自体が海外でどのように変化の波を受けたのか、実際には見聞できないので分かりにくかったようである。

生徒は日常何気なく使っている日本語を見つめ直すことができたようだ。「日本語は難しい。」「自分は正しい日本語を使えない。」という意識の生徒が目立った。これは、日本語の使い手としての自覚をもつという点では正しい認識かもしれないが、この意識のために日本語を学ぶ姿勢が消極的にならないように注意したい。むしろこの意識を踏まえ、日常生活で自分が使っている日本語を見つめ直し、主体的に学ぶ態度を育てたいものである。

3 個性に応じた学習を通して、古典への関心を高め、理解力を伸ばす古文指導の工夫

1. 単元 軍記物語に親しむ

2. 教材 『平家物語』（「古典」）

（第九巻「知章最期」第十一巻「能登殿最期・知盛入水」）

3. 単元の目標 ①古人の言動に注目することによって、普遍的な人間心理を理解し、古文に対する関心を高める。

②音読や朗読を通して、『平家物語』のもつ語感・リズム感を味わい、鑑賞を深める。

③極限状況下に生きる人間の姿からそれぞれの生き方を見つめ直すとともに自分の考えを的確に表現する力を養う。

4. 単元設定の理由

古典の時代から連続する普遍的な人間の心に触れさせることにより、生徒が古文に対してもつ抵抗感をできるかぎり軽くし、学習に参加させようとするのが、この単元設定の主旨である。2年生の古文を最後に、以後一生古文に触れない生徒もいる。また、古文と外国語を同一視して匙を投げている生徒も多い。このような生徒の苦手意識を解消させるため、古人の言動を通して、古典の世界に対する関心を高めさせることが本単元の目標の一つである。

ここでは、特に文法を読解の補助程度の取り扱いとし、古典世界の異なる風俗習慣を踏まえて人間に対する興味に焦点を絞った授業を目指した。また、授業の形態は生徒の作業や発表を中心におき、活動を重視した。特定の人物の紆余曲折ある人生をたどることで、その人物の個人としての生き方というミクロの視点から、最終的にその教材の全体像にまで生徒の関心が広がるように配慮した。すなわち、古人の言動に対する生徒自身の感じ方や意見、疑問の中からその作品の主題を自分なりに考えることを通して、彼らが古典の世界を自ら発見していくことである。教材の中の登場人物の言動に共感したり、反発したり、疑問に思ったりする生徒の関心を学習の中心に据えることにより、古文の簡潔な文章の行間を読ませ、古文の微妙な味わいに気付かせる。そして、発見と疑問の連続が、生徒一人一人の興味を広げていくように、1時間ごとの生徒の到達点を踏まえ、最終的にそれぞれが感じ取ったものを表現させることをねらいに据えることとした。

このような理由から、『平家物語』を教材に選び、武者たちの最期の場面を題材とすることにした。極限状況下における人間の行為は、現在の高校生にとっても胸打つものであろう。もちろん、死の美学のような受け取り方をしてもらいたいわけではない。逆に、目前に死が迫っ

ているときに、「どういう人生を全うするか」は「生きる姿勢」の表出であって、戦争と平和にかかわらず自分自身の生き方として考えてほしい点である。例えば『平家物語』の象徴的なせりふの一つ、知盛の「見るべきほどのことは見つ」ということばのもつ重みは、平家滅亡に至る歴史的背景の広がりの中でこそとらえられるべきものである。それには息子を失う場面「知盛最期」から自らの最期である「知盛入水」までの間で揺れ動く人間知盛の言動が、今日的な意味においても生徒の関心を十分にとらえ、古文を身近にひきつけて考えることができると思われる。すなわち息子を見殺しにした父親が、どういう形で自らの中にその事実を取り込んでいくかという命題を抱えた知盛は、人物としても陰影に富み、一本気な能登殿の最期と対照させながら興味深く読ませることができる。

さらに、『平家物語』が簡潔でリズムカルな文体であり、朗読に適した作品であることも選定の重要な要素になった。読解を助ける手段として、本文テキストには下段の語句の説明以外に、重要文法・語句を各章段のポイントとして配した。特に、文法は敬語、音便、疑問・反語に限り、それも読解を助ける程度の扱いとした。また、軍記物につきものである武具、装束一式、風俗習慣を「ワークシート」形式で事前に学習のための補助資料として用意した。視覚で表現すべきものは、極力プリントに載せ、具体性を心掛けて生徒の学習の利便を図った。

また、各章段ごとに授業を進めるが、場面把握ごとに朗読を積極的に取り入れ、雰囲気をつかませるようにした。特に、知盛、能登殿については、各章段ごとに「人物カード」を作らせる学習を授業の中心とし、場面ごとに人物像を意見発表等で互いに確認しながら、最終的に立体的な人物像にまとめさせるよう工夫した。最後の時間に、自分の気に入った人物に対して、一定の形式で一人一人の生徒に手紙を書かせ、それを集約し、生徒の課題への理解度・関心度を確認し、評価につなげることとした。

5. 指導計画（第2学年対象、配当時間9時間）

	指導事項	学習活動	指導上の留意点
第1時	①『平家物語』のもつ語感及びリズム感を味わう。	①単元全体の流れを理解する。 ②教師の判読に続いて斉読する。 ③ワークシート、人物カードの使い方を理解する。	①単元の目標をしっかりと理解させる。 ②斉読は軍記物特有の擬音、リズムを意識させ、できるだけ多くの生徒に声を出させる。
第2時	①『平家物語』の背景人物関係をつかむ。 ②読みの練習をする。	①ワークシートで調べたことを発表しながら、説明・解説を行う。 ②全文を斉読のあと、「知章最期」をさらに二段に分けグループによる音読を行う。	①平家の置かれた状況を把握させ、本文への導入にする。 ②『平家物語』における読みの重要性について、繰り返し強調する。

第3時	①「知章最期」の読解鑑賞を行う。	①全文斉読、列ごとの音読で内容理解に努める。 ②「知章最期」の人物カードをもとに読解を進め、カードに記入し、発表し、提出する。	①人物の心情を意識した読みの重要性を強調する。 ②重要語句は押さえるが、文法説明は、読解を助ける程度とする。 ③人物カードは毎回提出させ、評価をして、良いものは次時に紹介する。
第4時	①「知盛告白」の読解及び鑑賞を行う。	①前回のカードと比較しながら、読解を進める。(カードに記入、発表、提出)	①前回と同じ点に注意させながら、人間知盛の告白に注目させる。
第5時	①「戦下知」で再生した知盛の心の動きと、平家滅亡の様子を理解する。	①ワークシートを使い平家滅亡の様子を確認する。 ②人物カードで、知盛と背景人物とのかかわりを考え発表、提出する。	①合戦の状況や、それぞれの人物を系図、合戦図を用いて確認する。 ②「戦下知」における知盛の再生の原因を考えさせる。
第6・7時	①斉読に時間をかけ、本文の臨場感を高め読解を深める。 ②「能登殿最期」の読解を行い、能登殿と知盛についての理解を深める。	①「能登殿最期」の列ごとの斉読を行う。 ②ワークシートで、能登殿の装束や戦いぶりをとらえる。 ③あらすじを確認し、読解を行う。 ④「能登殿最期」の人物カードを記入し、発表し、提出する。	①能登殿の奮戦ぶりがよく表現できるように工夫させる。 ②当時の戦い方、武器などをワークシートで確認させ、能登殿像を考える参考にさせる。 ③立場に応じた微妙な意識のずれや行動をとらえ、能登殿と知盛、義経を比較する。 ④人物カードが、知盛と能登殿の心理の違いを踏まえながら記入させる。
第8時	①「知盛入水」の読解を行う。 ②知盛像について立体的にまとめる。	①「知盛入水」の斉読・読解を行う。 ②人物カードに記入し、今までの分と合わせて、知盛を立体的にとらえる。	①「見届け役」といった解釈から更に踏み込んで、なぜ知盛が自分にそうした役割を課したのか、考えさせる。 (知章、宗盛などとの関係)
第9時	①登場人物への手紙を書く。 ②本文を読んで、「平家物語」の表現する世界に対して理解を深める。	①返却された人物カードを再度検討した上で、知盛能登殿のどちらかを選んで手紙を書く。 ②本文全体を列ごとに音読する。	①人物を一方的に見ることなくその人物の身になって考えるよう指示する。 ②情景を思い浮かべながら、生き生きとした音読となるよう注意する。

6. 評価の観点

- ①導入時 ア. 生徒が『平家物語』を読解・鑑賞するための文法、語彙、中世の文化、歴史的背景などをどの程度理解しているか実態を小テストや調査で把握する。
- ②展開時 イ. 本文を的確に読み、「人物カード」の作成を通して、知盛、能登殿などの登場人物に対する理解を深め、古文に対する関心を高めることができたか。
- ③まとめ ウ. 毎回の「人物カード」等を自分なりにまとめ、知盛像、能登殿像を立体的にとらえることができたか。
- エ. 知盛、能登殿に対する気持ちを手紙文の形式にしたがって表現することを通して、古人の生き方に迫り、自分の意見をもつことができたか。

7. 考察

一の谷の合戦から壇ノ浦までの『平家物語』の推移を、知盛と能登殿に視点を据え、「ワークシート」・「テキスト」・「人物カード」を使うことによって、生徒一人一人が、自分で調べ、理解し、考察し、自分なりに表現できる授業を展開することができた。そして、死に直面した人間の普遍的な心理の学習を通して古典の世界をより身近なものに感じた生徒が多くいたようである。従来は古典作品の一場面のみを扱い、断片的な人間像しか浮き彫りにならなかった。この反省から科目「古典講読」の趣旨も踏まえて、第5時には現代文によるあらすじのみの授業展開という大胆な試みも行い、生徒の関心・意欲を高めた。このことは、戦乱の時代に生きた人間の複雑微妙な心理をとらえ、人間の在り方生き方、すなわち極限状況下においていかに自分の人生を生きるかということを考えるには有効であった。一つの作品にじっくりと向き合わせることの大切さを痛感した。

「ワークシート」・「テキスト」・「人物カード」の3つのプリントを使用するため、生徒が混乱しないよう色分けし、配付する際によく説明した。プリントを利用する授業の展開を把握すると、生徒は学習に集中して取り組むようになり、次回の学習展開を楽しみにするようになった。

「ワークシート」は、絵や図を多く入れ、視覚的に具体化し、日本史やクイズに近い課題までそろえたので、古文の苦手な生徒も、興味をもって取り組み、図書室で調べたり、授業中でも活発な発言があった。また、テキストは補注が多く物語の流れを補い文法の説明を付けたものであるため、生徒は比較的抵抗感なく本文に即して内容をとらえることができた。特に、「人物カード」は、授業ごとに毎回提出させて指導者が簡単なコメントと評価をつけ、その内の数点を選んで次の授業の始めにプリントし紹介した。このことは、生徒の理解を助け、意欲

を高めることにつながった。さらに、生徒が知盛という一人の人間の心情を理解し、人間心理を多面的にとらえる手立てとなり、手紙を書く時にも役立った。手紙は作文の苦手な生徒も手紙という形式が新鮮で、熱心に取り組むことができた。

しかし、問題点もいくつかある。第1に「人物カード」を記入するのに時間がかかり、生徒間で互いの考えを発表し合って鑑賞を深める時間が不足した。授業の回を重ねるごとに生徒は解答欄を大きくはみ出して書くようになり、一生懸命書いているだけに、次の設問に移行する間合いをとるのが難しかった。第2に、時代背景、いくさの経緯などに関して、生徒の興味は多様で、予想外の点に疑問をもち、それを生徒同士で調べ、発表する時間やシステムが不十分であった。第3に、音読を通して読解を深めさせるまでには至らなかった。音読、朗読は1学期当初から習慣付けるとともに、もっと時間をかけて工夫すべきであった。

本実践を発展させ、グループで生徒が『平家物語』の中で興味・関心をもった人物を選び、その人物に関連した章段を読解、鑑賞、群読発表することなどが課題として考えられる。

② 知盛が自分自身を許す許さないということ、知重、頼方を見殺しにしたことを、そんな行動を取ったことを、生自分の中の毒として引きずっていないかなければならないことの苦しみに耐えてゆけるか、それとも自滅してゆくのか、ということ、みんなに自分の気持ちを告白した強さを今度は、生きる人間としての強さに変えられるかどうか。

③ 死の恐怖への逃避は理解できなくはない。しかし、武士として、人間として死はつきもの。そのことは多くの経験を通して貴方(知盛)がよくわかつていたので、自分の分身である子供の生きざまを、部下の生きざまをよく振り返ってみよう。

① 一言で言うと寂しい人。自分の本当の心、子や家臣を見殺しにしてまで逃げたいと思つた心に気づいてしまったから。しかし、その自分の心をわざわざみんなに話したことから、心の強さを持っている人だと思つた。また、自分の取すべき心を明らかにすることで、誰かに許してもらいたかつたのではないかと思つた。

例 第二段落 4の知盛の告白に対する生徒感想
生徒意見大要

A、自分の恥をあえて告白した点は立派である。(『自省する態度』)

B、人間として、たとえ親子でも自分の命が優先するのは当然だ。 質疑問：それで済むのか?

知盛のしたことは、人間の持つていて弱さであり、この弱さを苦しみ悩んで、みんなに非難されるかもしれないのを承知で、言つたのは強いと思います。そこにいたみんなが誰も知盛を非難しなかつたのが、その証拠だと思えます。

1、大臣は、父を助けて戦死した知重の行動をどう受けとめていくかが、本文中から、六文字(句読点は含まない)で抜き出さない。

2、大臣は、知重を誰の年令と同じ若さなのに残念、と言っていますか。

知盛の印象
 3、知盛が、二人を見殺しにした理由は、なんだつたかと、告白していますか(本文抜き出しが、簡潔な訳でよい)

4、知重の告白を聞いて、あなたは彼に対してどう感じましたか。

背景人物群
 1、大臣は、父を助けて戦死した知重の行動をどう受けとめていくかが、本文中から、六文字(句読点は含まない)で抜き出さない。

2、大臣は、知重を誰の年令と同じ若さなのに残念、と言っていますか。

3、知盛が、二人を見殺しにした理由は、なんだつたかと、告白していますか(本文抜き出しが、簡潔な訳でよい)

4、知重の告白を聞いて、あなたは彼に対してどう感じましたか。

背景人物群
 1、大臣は、父を助けて戦死した知重の行動をどう受けとめていくかが、本文中から、六文字(句読点は含まない)で抜き出さない。

2、大臣は、知重を誰の年令と同じ若さなのに残念、と言っていますか。

知盛カード NO.1
 第二段落 知盛の告白
 登場人物 (平知盛) () () () () () () () () () ()
 場所 () () () () () () () () () ()
 あらすじ () () () () () () () () () ()
 背景人物群 () () () () () () () () () ()
 知盛の印象 () () () () () () () () () ()
 組 番氏名 () () () () () () () () () ()

4 個性に応じた学習を通して、古典への関心を高め、理解力を伸ばす漢文指導の工夫 〈はじめに（主題および単元設定の理由）〉

平成6年度から実施される高等学校学習指導要領のねらいの一つに、「国語理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視する」とあり、国語科では古典教育の充実が図られることになった。それは、「古典講読」をはじめ、古典に関する科目が増えたことから明白である。その古典が、古文・漢文と並立されていることから、漢文の履修の幅も拡大したと考えられる。戦後半世紀近く過ぎる過程で、漢文は学習指導要領が改訂されるたびに単位数が減少するばかりであった。それだけに、今回の改訂を漢文教育を活性化するきっかけとする必要がある。そこで、漢文研究班はまず、戦後の各学習指導要領を遡及し、昭和26年のものに「国語科における漢文の学習指導」の模範とすべき点が含まれていることを見出した。これが漢文の学習における最も明確な目標を示しているのとらえ、今後の漢文教育にとっても、学ぶべき内容が極めて多いものと考えた。以下に、その目標を掲げる。

- ①漢字・漢語の構造や発音の意味を理解し、かつこれを正しく効果的に用いる技術と能力を高める。
- ②漢文体や漢文口調の言語・文章の特質を理解し、それを国語の効果的使用に役立てる。
- ③漢文の文章の構造を理解し、読みこなす能力を伸ばす。
- ④我が国の文学と漢文との関係を理解し、広く文学の鑑賞に資する。
- ⑤我が国の古典としての漢文をよく理解し、我々の生活を豊かにする。
- ⑥日本文化・東洋文化に貢献した漢文の意義を理解する。（昭和26年学習指導要領より）

これは、新科目「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」「古典講読」の各目標にある「古典としての漢文」の本来の在り方を指し示している。そこでこれらを「日本の古典としての漢文・日本語の源泉としての漢文」ととらえ、標記の主題について研究することにした。しかし、上記①～⑥の全てを1単元で満たすことはできない。このため、本年の漢文班は上記の目標を構造的にとらえ、単元を一つに絞らず、新科目にも生かせるよう工夫した。さらに、教材選定にも配慮し、各校の生徒の実態を踏まえて、以下、入門・基礎・発展という3段階の研究実践を行った。

- A 入門編（26年学習指導要領の①～③に重点を置いた。）
- B 基礎編（26年学習指導要領の②～⑤に重点を置いた。）
- C 発展編（26年学習指導要領の④～⑥に重点を置いた。）

A 入門編 (単元の目標は26年学習指導要領の①～③に相当)

1. 単元 故事成語や格言を通して訓読法を身に付ける。
2. 教材 「五十歩百歩」「矛盾」「蛇足」(「国語Ⅰ」)
3. 単元の目標 初歩的な語法で構成される短い文章(故事成語の出典)や様々なパターンで訓読する格言などの学習を通して、基本的な訓読法と語法とを身に付けるとともに、古代の中国の人々の知恵に触れて、漢文に対する関心を高める。
4. 指導計画(第1学年対象、配当時間9時間)

時	指導事項	学習活動	指導上の留意点
第1時	①日本語と中国語の語順の違い ②熟語の構成	①日本語と外国語との語順の違いを確認する。 ②使い慣れている熟語が訓読できること、いくつかのパターンに分類できることを確かめる。	①「我愛你」など、生徒が興味をもてる言葉を例に、返り点の必然性に気付かせる。 ②熟語が漢文の凝縮された形に当たることに気付かせる。
第2時	③熟語の訓読練習	③プリントの問題を練習する。	③口頭で答えさせる。 古語文法の用言の活用や歴史的仮名遣いの復習を兼ね、漢文独特の言い回しにも触れる。
3	④「五十歩百歩」の由来の学習	④板書を見て、プリントの白文に訓点を施す。	④板書しながら語法等を解説し、字義や語例にも触れる。
第4時	⑤「五十歩百歩」の由来の学習 ⑥読みの練習	⑤連環画により故事成語の成立事情を確認する。設問を考える。 ⑥斉読と指名による音読をする。	⑤日常使用されている意味とのニュアンスに注目させる。 ⑥一文ずつ範読を復唱させ、一人ずつ指名する。
5時	⑦語法のまとめと練習	⑦説明の後、プリントの問題で練習する。	⑦机間を巡って、定着度を確認する。板書で答えさせる。
67	⑧「矛盾」の由来の学習	⑧上記④～⑦に準ずる。	⑧上記④～⑦に準ずる。
89	⑨「蛇足」の由来の学習	⑨上記④～⑦に準ずる。	⑨上記④～⑦に準ずる。



「マンガ 孫子・韓非子の思想」より



「連環画 中国の故事名言」より

5. 評価の観点
 - ①訓点にしたがって訓読できるようになったか。
 - ②語法を理解し、正確に現代語訳できるようになったか。
 - ③故事成語等の意味を把握し、日常の表現に正しく使えるようになったか。

B 基礎編 (単元の目標は26年学習指導要領の②～⑤に相当。)

1. 単元 日本漢文の史伝を通して漢文の口調に親しむ。

2. 教材 「桶狭之戦」(頼 襄『日本外史』より) (「国語 I」に相当)

3. 単元の目標

- ①比較的長い漢文に触れ、音読を通して訓読漢文に親しむ。
- ②書き下し文の練習を通して、漢字とかなのバランスについて理解する。
- ③我が国の歴史的人物についての描写を把握し、各自の考えを表現する。

4. 指導計画 (第 1 学年対象、配当時間 4 時間)

時	指導事項	学習活動	指導上の留意点
第 1 時	①史的背景について理解する。 ②今川義元の侵攻に信長が決戦を覚悟するまでを音読する。 ③同箇所の書き下し文を点検する。 ④各自の書き下し文を使って再び音読する。	①信長と桶狭之戦の知識の有無を問う。 ②指名読み、範読、斉読等繰り返し音読に努める。 ③ノートの予習してきた文を各自で訂正する。 ④各自のペースで読む。	①概略に留める。合戦図を配り合戦の場所のみ確認する。詳細は口語訳と並行して行う。 ②すべて訓読みになる人名・地名をあらかじめ指摘し、他は漢文の原則通りに読む。 ③仮名に直す字のみ指摘し、漢字にはルビの多用を勧める。 ④机間を回って質問に応じ、誤読をなくす。
第 2 時	⑤口語訳を確認する。 ⑥信長の決断について考える。 ⑦出陣の酒宴から勝利までを音読する。	⑤一人に一文ずつ当て、訳を試みる。 ⑥数名が発言。全員が考える。 ⑦上記②に同じ。	⑤送り仮名(主に助動詞助詞)の部分に特に留意する。 ⑥言葉の当否より、信長の家臣団の意志統一の図り方に注目する。 ⑦上記②に同じ。

第 3・4 時はほぼ、表の繰り返し。4 時の終わりに各自の感想・考えを課題とする。

三年五月、義元自將三國兵四萬五千來攻。十八日、大學・定宗馳使清洲告曰：「義元昨日至沓懸。今夜將運糧大高而攻兩城也。信長召將士言曰：『我欲赴援如何。』林通勝等說曰：『敵衆垂五萬而我兵不過三千。宜避其來銳。據本城待之。』信長曰：『不可。吾視天下英雄恃其地利以失事機。自取滅亡者不爲少矣。先君有言：『隣國之來犯，苟有遲疑，我將士且變志。』當亟出迎戰。』言不敢背先君之教。明日將一戰決勝敗也。與吾同志者努力。諸將莫敢諫者。」

5. 評価の観点

- ①音読を通して内容を理解し、訓読漢文に親しむことができたか。
- ②日本の古典としての日本漢文に対する関心を高めることができたか。
- ③信長についての漢文による歴史を読んで、その感想を表現できたか。

C 発展編 (単元の目標は26年学習指導要領④～⑥に相当)

1. 単元 漢字文化圏の中の日本

2. 教材 「織田信長」(日本外史)、「項羽」(史記)、「朴提上」(三国史記)

3. 単元の目標

明治の漢文 3 編

- ①日本漢文数編を読み、我が国における漢文の受容と展開の在り方について

理解し、我が国の古典としての日本漢文について認識を深める。

②「英雄の死」を描いた日本・中国・朝鮮半島の漢文を読み、各国の漢文の伝統と各人物についての理解を深め、個性に応じた読解を試みる。

③アジア各国の漢字・漢文の受容の歴史と文字の発生の歴史を知り、東洋文化における漢文の意義について理解し、漢文の位置付けを認識する。

4. 指導計画（第2学年対象、配当時間11時間）

時	指導事項	学習活動	指導上の留意点
第1時	明治の漢文Ⅰ 「拿破侖」	①斉読・指名読みにより音読に慣れる。 ②口語訳を発表しながら、句法について確認する。	①明治期の漢文に触れることによって、近代における日本漢文の存在を認識させる。 ②近代に入ってきた外来語が漢字でどのように表現されているかに注意を促す。
第2時	明治の漢文Ⅱ 「航西日記」 同Ⅲ「送夏目漱石之伊予」	③上記①・②に準ずる。 ④明治の漢文Ⅰ～Ⅲに出てきた外来語を抜き出し漢字の性質について考える。 ⑤漢字クイズを解き、楽しむ。	(3)森鷗外・正岡子規・夏目漱石など生徒になじみのある文学者の漢文を味わわせ、漢文に親しみをもたせる。 (4)外来語の漢字表現・漢字クイズから漢字の表意性・表音性を認識させる。
3 ・ 4 ・ 5	江戸の漢文 「織田信長」	⑥戦国時代の史的背景や人物関係について調べたことを発表する。 ⑦上記①・②に準ずる。 ⑧信長の死の理由や本能寺の変の感想をノートにまとめ発表する。	(5)日本漢文の伝統や史伝において漢文表現が正統の文体であったことを認識させる。 (6)信長の死の状況を中心に、その行動・言葉から、日本外史に描かれた信長の人物を把握し、自分の意見を明確にさせる。
第6 ・ 7 時	中国の漢文 「項羽」	⑨「四面楚歌」の連環画を読むことにより、秦末の状況を理解する。 ⑩上記①・②に準ずる。 ⑪項羽と信長のどちらを好むか、死の状況や性格の違いをまとめ、発表する。	(7)秦末の人物群について正しく理解させる。 (8)項羽の死の状況と人物像を把握する視点を信長と比較しながら養わせる。 (9)二人のうちどちらを好むかについて発表させることによって、個性に応じた主体的な読解に導くようにする。
第8 ・ 9 時	漢字文化圏の中の日本	⑫漢字クイズを解き、アジア各国の漢字を利用した自国文字の発生を理解する。 ⑬日本・朝鮮半島・ベトナムの漢字・漢文の受容と自国文字の発生をテキストを読み、理解する。 ⑭ビデオ「遙かなる漢字の旅」を見て視覚的な理解を深める。	⑩各国での漢文の受容は漢字の表意性を利用し、自国文字の発生は漢字の表音性を利用していることを認識させる。 ⑪各国の自国文字の発生から現在の文字に到るまでの歴史を理解させ、漢字の位置付けがどのように変わったかを理解させる。 ⑫日本で漢字・漢文の世界が存続している理由と他国で廃れた理由を考えさせる。
第10 ・ 11 時	朝鮮半島の漢文「朴提上」	⑮朝鮮半島の三国時代や日本との関係について理解する。 ⑯上記①・②に準ずる。 ⑰信長・項羽・朴提上のうち最も好む人物について、その理由を他の二人と比較しながらノートにまとめ、意見を発表する。	⑬当時の日本と朝鮮半島の間を正しく理解し、朴提上の人物像を把握させる。 ⑭3人の英雄の死を比較することで漢文を通して個性に応じた読解を促し、その結果を自分の言葉で表現させる。 ⑮異なる3国の漢文の読解と比較が可能であったことを認識させ、日本における漢字・漢文の意義について考えさせる。

5. 評価の観点

- ①各文章についての内容やその文章の記された時代と国について正しく理解されているか。
- ②三人の英雄の中で、自分が最も好む人物を挙げ、その人物を好む理由について、他の二人の人物との相違点を述べながら、説得力のある説明ができるか。
- ③漢字が消滅した他のアジア諸国と比較しながら、日本に漢字・漢文の伝統が存続している理由や自分自身が漢字を使用する意義について、自分なりに表現できるか。

<終わりに (考察)>

A 入門編 本単元のねらいは、漢文はシンプルな古文であり、いくらかの約束事さえ承知すれば、既に学んだ古文の知識で十分対応できることを理解すること、日常の表現の中に漢文の世界に依拠するものが多いことを学習し、漢文を身近なものとして受け止めることであった。熟語の訓読からスムーズに漢文の世界に足を踏み入れ、連環画等を通して聞き覚えのある故事成語や格言の背後に広がる古代中国の情景を垣間見ることができたことは、生徒にとって、基礎編の学習に向けて良き土壌を形成し得たと考える。また、原文による故事成語の出典の学習は文学研究の基本的な姿勢を養うのに役立ったと考えられる。

B 基礎編 本単元のねらいは、生徒の協力の下に概ね達成された。信長という教材が功を奏したと言うべきだろう。ここでは、指導者側の反省を課題として述べる。

入門期を終えたばかりの生徒に旧字体のテキストを与えると若干の混乱を来すこと。次に、故事成語の単元で正確な口語訳の方法論を学んだ後だけに、たとえ漢文口調に慣れることがねらいであっても、粗筋を追うことを主とする読み方では、一部の生徒に不安を与えること。合戦の教材が適当であるかどうか検討する余地があること。

C 発展編 本単元のねらいは、「各国各時代の多様な漢文」「漢字文化圏各国の文字の文化史」を2本の柱とし、その理解を通して日本の漢文の位置付けを生徒に考えさせることであった。各国の漢字・漢文の受容の変遷や漢字に対抗した文字の発生を知って新鮮な驚きを示し、日本での漢字使用の意義について考え、漢文の存在に対しても見方が変わったと語った生徒が多かった。漢字に抵抗を感じる高校生が少なくない現在、漢文を効果的に指導するためには、もっと漢字そのものの意義に対する認識を深めさせることが必要であることを、今回の授業を通して痛感した。また、3人の英雄について読むのは授業内容が盛り沢山になるのではないかとの懸念もあったが、最後の最も好む人物についての意見発表では、予想した以上に様々な視点からの発表があった。3人を読むことで比較の対象が広がり、自分の好きなタイプの人物を見つけることができ、結果的に生徒の個性に応じることができた故であると考えられる。

IV まとめと今後の課題

生徒の国語に対する関心を高めるためには、まず、生徒が自分の身近な問題と感ずる教材を数多く発掘するとともに、生徒の意欲を引き出す指導法を開発することが大切である。そのため、講義調の一方通行の授業展開を見直し、一人一人に参加する喜びを与える授業を創造していくことが必要である。この点を踏まえ、各分野で以下の研究実践を行った。

表現班においては、自己の内面を見つめ、自分の言葉を引き出して表現することにより、自分を客観的に見つめ直し、さらに指導者の肯定的な評価を通して表現活動に対する関心と理解を高めることができた。

評論文班においては、日本語の国際化の問題を身近な例として取り上げて言葉に対する理解と関心を高めた。また、様々な立場の意見を比較考察した上で、再び主教材に戻って学習することにより、自分の意見を再構成して論理的に表現する能力を高めることができた。

古文班においては、文法的な指導を極力控え、『平家物語』を古人の言動に着目して学習することにより、その心情を多面的にとらえ、古文に対する関心と理解を高めることができた。また、本作品が人間としての在り方生き方を考えるのに適した教材であることを確認した。

漢文班においては、入門・基礎・発展と段階的な学習構成とし、日本の古典としての漢文あるいは日本語の源泉としての漢文を取り上げることにより、漢文を身近な教養として再認識させ、漢文に対する関心と理解を引き出すことができた。特に、連環画・日本漢文・漢字文化圏各国の文字や漢文などの教材化は新たな工夫として成果があった。

今後の課題については、各分野別に以下に掲げることとする。

1. 表現班では、内面の言葉を無理なく発見させるための工夫や、生徒の表現活動を肯定的に評価する際の評価の観点の明確化、さらに、生徒間の相互評価と指導者による客観的な総合評価とのかかわりの位置付けなどについて、考察及び検証を一層深める必要がある。
2. 評論文班では、生徒が評論文に親しむ態度を高めるよう、新聞などの身近な素材を発掘するとともに、綿密な年間指導計画に基づく継続的な学習により、論理的な思考力をさらに高めていく必要がある。
3. 古文班では、古典に対する理解を高め、日本の文化と伝統に対する関心を一層深めるために、特に、鑑賞、朗読等を綿密な年間指導計画に基づく継続的な学習とし、さらに、人間としての在り方生き方にかかわる新たな古典教材の内容・形式の開発を進める必要がある。
4. 漢文班では、戦後半世紀に近い漢文の衰退を再生するため、学習指導の斬新な改善方法について吟味を重ねるとともに、現在の高校生に合った新たな教材の開発を行う必要がある。